

福祉のひろば 6

2015



特集 たこ焼き屋のお父さんが 認知症になった

熱中症 予防と社会的背景——対策と支援を考える

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

総合社会福祉研究

第45号 発行しました！

本体2000円（税・送料別）
当研究所会員は割引あり

特集1 子ども・若者の貧困と社会保障の貧困

若者問題と社会福祉実践の課題——貧困化と孤立に対峙する実践を求めて … 山本耕平
若者支援実践におけるピアスタッフの実践的価値

——ピアスタッフのゆらぎに焦点を当てて …………… 岡部 茜

若者支援政策の変遷とその課題 …………… 南出吉祥

韓国の若者運動——対象から主体に …………… 姜 乃榮

スクールソーシャルワーカーからみた子どもの貧困と学校 …………… 岩田美香

特集2 社会福祉に問われる今（第19回合宿研究会）

海外福祉情報

オーストラリア・ビクトリア州における犯罪をした人の
社会復帰支援のための司法と福祉の連携の現状 …………… 森久智江

総合社会福祉研究所 〒543-0055 大阪市天王寺区悲田院町8-12
TEL06 (6779) 4894 FAX06 (6779) 4895

ホームページ <http://www.sosyaken.jp/> E-mail: mail@sosyaken.jp

たこ焼き屋のお父さんが 認知症になった



大阪市西成区^{はなその}花園町の商店街で50年つづくたこ焼き屋「^{いちふく}一富久」。「無愛想やけど、焼き加減が絶妙！」と有名だった店主の^{おかおふみほち}岡尾文八さんは、6年ほど前から認知症の症状がではじめました。いまは車いすでの生活となり、認知症対応型のデイサービスを利用しながら家族と生活しています。お店はお母さん（文八さんの妻）、息子さん、娘さんが守っています。



浴槽をつくる職人だった文八さんは、結婚を機にもともとお母さんが働いていた「一富久」を一緒にやっていくことに。かつおだしの効いたたこ焼きの味もさることながら、黙々とたこ焼きを焼く文八さんと、サービス&愛嬌^{あいきょう}たっぷりのお母さんのお店は、地域に根づき、新聞や雑誌にもとりあげられる名店になりました。

現在の「一富久」



「平日の夜はヒマやから〜」と聞いてうかがいました。ところが、ひっきりなしにお客さんがきて、店内のカウンターもお持ち帰りも、人が途切れません。「お父さん元気にしてる？」と心配してくれるお客さんもたくさんおられるとのこと。「お父さんのほうが焼くのうまかったからね。ガンコで愛想ないけど、器用やったから。お客さんからお父さんのたこ焼きが食べたいわ〜って言われますね」とお母さん。

13年前の「一富久」



(写真下：お客さんが撮ってくれたという写真をお借りしました。左が文八さん、その隣は息子さん)



文八さんが利用する認知症デイサービス「ひなたぼっこ」は、「お店もあってたいへんやけど、どうしてもお父さんは家でみたい」というご家族の思いに寄り添い、一緒に文八さんとご家族の生活を支えています。「ひなたぼっこ」には、学生時代に文八さんのたこ焼きを食べて育った職員もいます。

認知症になっても、住み慣れた地域で、家族と一緒に暮らしたい。今号の特集では、岡尾さん一家の日常から、認知症ケアのあり方を考えたいと思います。
(写真・文 申佳弥)

【ひろばトーク】

認知症があっても安心して暮らせる社会へ 勝田登志子 6

●特集● たこ焼き屋のお父さんが認知症になった

私が元気なうちは何とか家族でみていきたいです 中島 素美 10
認知症Q & A——池田信明さんに聞く 20
新オレンジプラン 活かせる点はどこにある 石倉 康次 26

●サブ特集● 熱中症 予防と社会的背景——対策と支援を考える

求められる認知症のある方への気配り 高橋貴美子 33
「夏の熱中症死亡者数の状況(東京都23区)」
資料に見る熱中症死亡者の特徴(東京都監察医務院) 37
地域住民、事業者との協働で地域の高齢者を見守る(東京・港区) 40
こんなとき、熱中症に気をつけましょう!! 45

●トピックス●

生活保護基準引き下げを取り消せ! 西村 憲次 46
釜ヶ崎で女性の貧困問題を考える 申 佳弥 48
第21回社会福祉研究交流集会 52

●連載●

フォーラム マイナンバー制度は廃止しかありません 細貝大二郎 56
相談室の窓から
S子ちゃんの心の奥にあるもの(その1) 青木 道忠 58
新 ソーシャルワークの原点と息吹を感じて
英国留学日誌はじまります! 伊藤 文人 60
育つ風景 子どもの話し合いから何をつかむのか 清水 玲子 62
「助けて!」って言ってもええねんで!
実効性のある子どもの貧困対策を 徳丸ゆき子 64
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ
子どもの頃の思い出 絹枝(2) 千田勝夫・絹枝 66
映画案内 『ゆずり葉の頃』 吉村 英夫 68
現代の貧困を訪ねて
世界金融危機と世界各国のホームレス問題 生田 武志 70
なにわ銭湯見聞録(26)
ラッキー的銭湯体験記・その一 ラッキー植松 72
いただきます!
納豆嫌いにはこれ! とりささ身の納豆サラダ 高鷲保育園 74
ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76
花咲け! 男やもめ 川口モトコ 77

福祉のひろば

2015年6月号

●表紙の絵●
神門やす子



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 54 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● たこ焼き屋のお父さんが認知症になった

認知症があっても 安心して暮らせる社会へ

公益社団法人 認知症の人と家族の会副代表 かつだとしこ 勝田登志子さん

認知症の人と家族の会（以下、家族の会）は、当事者視点からの介護保険への提言や、社会保障審議会での発信、各地での意見書や要望書の提出など、地域の団体とも共同しながら、認知症に対する正しい理解をひろめたい、と活動を進めています。「在宅介護から社会介護へ」と運動を進めてきて、二〇〇〇年に介護保険制度が創設されました。二〇〇七年、従来の要望中心の活動から提案型にきりかえ、「提言・私たちが期待する介護保険」を発表しました。その内容は、①必要なサービスを、いつでも、どこでも、誰でも利用できる制度、②誰にもわかりやすい簡潔な制度、③貴重な財源を介護サービスの充実のために有効に活用できる制度、④必要な財源が政府・自治体の公的な責任において確保されることなどを、当事者の立場から求め、発信し続けているのです。

家族の会は、一九八〇年に設立し、今年三五周年をむかえました。現在、会員は一万二〇〇〇人となり、全都道府県に支部があります。会の活動の三本柱は、本人や介護家族が集まり、話し合い、学び合う「つどい」や、困ったときやつらいときの「電話相談」、そして情報の共有や会員同士の交流の場としての「会報」の発行です。

「いまや、「つどい」は年間三五〇〇回、日本のどこかで毎日九回以上開催されている計算です。その発展したかたちである「認知症カフェ」のとりくみも、みんなの居場所としてひろがりつつあります。電話相談は年間二万件以上寄せられています。本部会報の発行数は毎月二万部を



かつだ としこ

なかにいかわ かみいちまち

1944年、富山県中新川郡上市町に生まれる。1982年に公益社団法人認知症の人と家族の会富山県支部を設立し、事務局長をつとめ、1986年に家族の会本部理事となる。現在は、本部副代表理事・常任理事。

1993年から認知症の義父の介護を、2000年には義母、実母が認知症となり、二人の介護を経験。家族の会の先輩たちのアドバイスが参考になった。2006年より、厚生労働省社会保障審議会介護給付費分科会・介護保険部会委員をつとめている。

超え、各支部でもそれぞれ発行されています。啓発活動も、毎年九月二一日の世界アルツハイマーデーにあわせて、全国で街頭活動、講演会などが開催されています。

今年四月一四日から二二日にかけて、オーストラリアのパスで開催されたアルツハイマー病国際会議に、認知症の本人三人をふくむ一三人で参加しました。そのなかで、介護歴一二年の松島恵子さんが「介護賞」を受賞されました。介護賞は、国際会議で今年はじめて設けられた賞です。松島さんは、つれあいが発症して一一年間、認知症であることを公表していなかったのですが、昨年、家族の会がはじめておこなった「安心できる介護保険を求めて」の署名活動がきっかけとなり、公表したのです。近所の家を訪問しながら、つれあいが認知症であることや、介護保険が使いづらくなることを訴え、夫婦で三〇〇筆以上の署名を集めることができました。その後、近所の人たちから、ダンスや太鼓教室に誘ってもらって参加しています。

世界では四五〇〇万人の認知症患者がおり、八四か国がアルツハイマー病協会に加盟しています。しかし、認知症であることを公表するにはまだまだ大きな壁があります。そうしたなか、松島さんが認知症を公表したことで、本人も家族もとても明るくなったことや、積極的に社会とのかかわりをもつことで、認知症があっても地域のなかで安心して暮らすことができる、と自ら発信することの大切さが受賞の理由となりました。

特集

たこ焼き屋のお父さんが認知症になった

今号の特集は、認知症問題を取り上げることになりました。タイトルは、大阪市西成区で暮らすたこ焼き屋のお父さんこと岡尾文八おかおふはちさんとその家族、そして、暮らしを支えている方々に登場してもらって、『福祉のひろば』としての「認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて」を考えてみることにしました。このスローガンは、今年一月二七日に国が打ち出した「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」のサブタイトルです。

このプランでは、「二〇二五年には認知症の人は約七〇〇万人前後となり、六五歳以上の高齢者に対する割合は、現状の約七人に一人から約五人に一人に上昇する見込みとの結果が明らかとなった。認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人に寄り添いながら、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるよう、環境整備を行っていくことが求められている。（中略）全国的な公的介護保険制度の下、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援が包括的に確保される地域包括ケアシステムの実現を目指す中で、社会を挙げたとりくみのモデルを示していかなければならない。（中略）認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けることができる社会を実現すべく、今般、『認知症施策推進五カ年計画』（オレンジプラン）を改め、新たに『認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～』（新オレンジ